

この記事の要点

- ・ 現地の様子や反応
- ・ オバマへの期待の内容
- ・ 人々の声

遂に幕を開けた「責任を果たす新時代」で人々はオバマに何を期待しているのだろうか。ごく普通のアメリカ人はどんな思いで新大統領を迎えたのだろうか。最終的にワシントンに集まった群衆は二百万人以上と言われる。

ワシントンの玄関口の一つのユニオン・ステーションでは、あまりの混雑に身動きできなくなった。そんな状況なのに誰もいららしてない。それどころか仕方がないといった感じで苦笑しながらも協力しあっている。どこもかしこも幸せそうな顔をした人々で満ち溢れていた。アメリカは今、未曾有の経済危機に直面している。それなのに人々の表情は決して暗くはない。オバマがいるからきっと大丈夫さ。彼らが心の中でそう言っているように私には思えた。



陽気な感じの黒人たちが次々とスーツケースを引きずりながらやってくる。まるで全米中の黒人がオバマの就任を祝うために一斉にワシントンに集まっているかのようだった。それくらい黒人の比率が高い。オバマのことを語る黒人たちはとても嬉しげで誇らし気だった。黒人たちにとって、オバマは **Yes We Can** ではなく、もはや **Yes We Did** なのだ。

地下鉄の中で出会った黒人女性は、オバマの写真で飾り立てられた素敵な鞆を持っていた。思わず「その鞆、素敵ですね」と声をかけると、「これは私が作った鞆なのよ」と教えてくれた。彼女は、新大統領の誕生をまるで自分の息子のことのように喜んでいる。そんな感じがした。居合わせた白人女性の乗客も「素敵ね」と彼女に声をかける。それを見ていた他の乗客も笑顔になり、無機質で冷たい感じだった地下鉄内が一瞬あたたかい空気に包まれた。オバマはそんな人々のつながりを結びなおす存在なのだ。

フード・バンクという貧しい人々に食べ物を届ける活動をしていた車椅子の黒人男性とラティーノの女性がいた。どんな活動をしているのか気になったので声をかけてみた。そして、彼らにとってオバマはどんな存在なのかを聞いてみた。



黒人男性は、「オバマはみんなを人種や様々な問題を超越えて一つにしてくれる存在だ」と語ってくれた。そして、ピースマークがついた鞆を持った女性は、「オバマは世界を再び仲直りさせてくれる人。再びみんなの心を導いて一つにしてくれる。ラティーノもオバマを支持している」と答えてくれた。彼らの真摯な目がとても綺麗だった。オバマはいろいろな人々の支持を集めているのと同時に、いろいろな人々に希望を与えているのだ。

オバマはとにかく人気者で、ハリウッド・スター顔負けの人気者になっている。ワシントンの至る所でオバマの等身大パネルが登場し、引っ張りだこになっている。オバマの等身大パネルは随所で見かけたが、バイデンの等身大パネルは一つしか見かけなかった。バイデンは影が薄く、すっかり人々の記憶から忘れ去られているようだ。オバマは人々にとても愛されている。これだけ愛された大統領はオバマの他にケネディくらいかもしれない。ワシントンはオバマ一色で、何にでもオバマの名前やオバマに関連する言葉を付けるという風潮。地下鉄内に、「Yes, with wind energy we can」という風力発電の広告があるかと思えば、街頭で「Be the change」と銘打ちドリンクの試飲を行っている。博物館までもが、オバマのイラストを使っている。街の至るところでオバマ・グッズが販売されている。書店でも二十もの雑誌がオバマの特集を組み、オバマの顔を表紙にする徹底ぶり。本当に何でもオバマ、オバマ、オバマだった。まさにオバマ特需と言える。





オバマへの声を集めるために私はアメリカ国旗を買ってきて市民に新大統領へのメッセージを書き込んでもらうことにした。最初は快くメッセージを書くことに応じてくれるだろうかと心配だったが、それは杞憂に過ぎなかった。いろいろな声があった。「私たちはオバマを愛している」、「アラスカはあなたを愛している」、「あなたを信じている」といったオバマに好意を伝えるメッセージ。「大統領とその家族に祝福あれ」、「オバマ大統領に祝福を」といった祈りの言葉。「変化が訪れた。オバマよ、ありがとう」、「私たちすべての希望」といった変化や希望を伝える文句。主に若年層や黒人たちが寄せ書きに興味を示して快くメッセージを残してくれた。自分から寄ってきて書いてくれた人もいた。一方で一部の白人の中には躊躇っているような表情をする人がいたり、寄せ書きをすることを断ったりする人もいた。口には出さないけれども黒人初の大統領誕生に戸惑いを感じている白人も少なからずいるらしい。もちろんオバマの就任に対して断固とした反対を唱える白人もいる。ホワイトハウスの付近で見かけた白人男性は、「オバマの出生はケニアだからアメリカの大統領になる資格はない」とプラカードに書いて訴えかけていた。他にもオバマの就任式をひかえて様々な主義主張を唱える人物も集まってきていた。グアンタナモの閉鎖を求めるためにハンガー・ストライキをしている団体や人工妊娠中絶に反対している団体などがワシントンの随所で訴えかけていた。多くの人々はオバマ就任をよろこんでいるがもちろん純粋にそうではない一部の人もいる。

白人の中に複雑な表情をする人がいるのは、過去に黒人を虐げてきた罪の償いはこれで終わりなのだという思いがあるのだろう。就任式は、長い間、歴史の表舞台で主役になることがあまりなかった黒人にとってはまさに祭日かもしれない。しかし、一方で白人にとっては贖罪の日ようだ。しかし、同時

に就任式は、「E Pluribus Unum(多から一つへ)」というアメリカの国家理念を再確認する日でもある。アメリカ国民が一つの国民として一体感を感じられるという至福の祭典なのだ。だからこそ多くのアメリカ国民にとって就任式はとても大切なイベントになる。

この場に居合わせて思うのは、これだけ多くの人々の期待を一身に集めるというのはどれほどの重圧なのだろうかということだ。行き交う人々は、心から希望に溢れた顔をしている。イベント会場では興奮状態になって叫びながら走っている人もいる。これほどの熱狂ぶりを見て実は恐怖を感じてしまった。もし期待が裏切られることがあれば、人々はオバマに対してどんな感情を抱くのだろうか。それでもアメリカは今、オバマという希望を見つけた。しかし、日本はどうだろう。